

「律法」と「法律」

私たちの生活には「法律」があります。道路交通法、民法、刑法——これらは国家や社会が秩序を守るために人間が制定した規範です。聖書の時代にも、バビロンの勅令やローマの法があり、人々はその中で生活していました。しかし聖書が語る「律法」は、単なる社会のルールではありません。律法は神ご自身が、人間(イスラエル)のために与えた「トラー」、すなわち「教え」です。

申命記 6 章 5 節には「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」とあります。これは律法のコアです。「律法」とはまず「神と隣人を愛すること」を基礎に据えた、信仰と生活全体の指針でした。十戒に示されているように、神との関係、人との関係、その両方を正しく保つための道標です。

「法律」はどうでしょうか。ダニエル書 6 章に登場するペルシアの勅令は、人々に王以外に祈ることを禁じました。

タイトル(書名)	章:節 聖句 [検索対象総数 : 3 / 聖句等の総数 33250 (勅令)3個]	聖書Navi Active 393128091 (新共同訳) [検索語彙 : 勅令]
ダニエル書	6:8 王国の大臣、執政官、総督、地方長官、側近ら一同相談いたしました。王様に次のような、勅令による禁止事項をお定めいただくということになりました。すなわち、向こう三十日間、王様を差し置いて他の人間や神に願い事をする者は、だれであれ獅子の洞窟に投げ込まれる、と。	
ダニエル書	6:13 王の前に進み出、禁令を引き合いに出してこう言った。「王様、向こう三十日間、王様を差し置いて他の人間や神に願い事をする者があれば、獅子の洞窟に投げ込まれるという勅令に署名をなされたものではございませんか。」王は答えた。「そのとおりだ。メディアとペルシアの法律は廃棄されることはない。」	
ダニエル書	6:16 役人たちは王のもとに来て言った。「王様、ご存じのとおり、メディアとペルシアの法律によれば、王による勅令や禁令は一切変更してはならないことになっております。」	

これは明らかに神への信仰を妨げるモノでした。人間の法律は時に正義を促しますが、時に権力者(政治家を含む)の思惑によって神に逆らう方向へと傾くこともあります。法律は社会秩序のためには必要ですが、それはあくまでも人間が作った可変的な規範に過ぎません。

パウロはガラテヤ書 3:24 で「こうして律法は、わたしたちをキリストのもとへ導く養育係となったのです。わたしたちが信仰によって義とされるためです」と語ります。律法の役割は、私たちに罪を示し、救い主の必要を悟らせることにありました。注意しなければならないことは、律法そのものが私たちを救うものではありません。律法は「神の御心を教えるもの」であり、救いはただイエス・キリストによってのみ与えられるのです。

イエスはは言われました。「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである」(マタイ 5:17)。イエスは律法の条文を超えて、その本質、つまり愛を示されました。だからこそ使徒パウロも「愛は隣人に悪を行いません。だから、愛は律法を全うするものです」(ローマ 13:10)と告げています。

ここに「律法」と「法律」の決定的な違いがあります。律法は「神との契約のため」にあり、法律は「人間の秩序維持のため」にあるのです。律法は「内面的な愛」によって人を導きますが、法律は「外面的な強制力」によって人を縛ります。

現代に生きる私たちは、律法のコアを心に刻み、法律を守る必要があります。もし律法と法律が衝突するとき——すなわち人間の法が神への忠誠を妨げるとき——「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません」(使徒言行録 5:29b)と宣言する立場に立たねばならないのです。

律法は私たちを窮屈に縛るためのものではなく、キリストのもとへ導く道標です。法律は時に変更になりますが、神の律法は変わることがありません。外面的な法にとらわれるのではなく、心の中に神の律法(愛の精神)を刻んで歩いて行きたいと思えます。